

氏 名 (本籍)	杉 本 章 吾 (京 都 府)			
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)			
学 位 記 番 号	博 甲 第 5560 号			
学位授与年月日	平成 22 年 10 月 31 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科			
学 位 論 文 題 目	〈少女マンガ〉の解体と更新 －岡崎京子における現代日本少女・女性表象の研究－			
主 査	筑波大学教授	博士 (文学)	青 柳 悦 子	
副 査	筑波大学准教授	博士 (文学)	吉 原 ゆかり	
副 査	筑波大学准教授		平 石 典 子	
副 査	筑紫女学園大学准教授	Ph. D. (English)	大 城 房 美	

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本の表象文化のなかで重要な位置を占める〈少女マンガ〉が、それ自体の枠組みに対する批判的な超克を繰り返しながら、いかに社会的な問題提起をおこなってきたのかを、岡崎京子というマンガ作家の諸作品を分析することによって明らかにするものである。とりわけ 1980 年代から 90 年代にかけて書かれた岡崎の作品群が、高度消費社会によって生み出され、またその社会に反応を返していく少女・女性像をどのように提示したのかを、背景となる時代状況の再検討とマンガテキストの分析の両面から照らし出す。

構成は以下のとおりである。

序章

第 1 章 〈少女マンガ〉をめぐる言説空間

第 2 章 郊外化された〈少女マンガ〉——『ジオラマボーイ・パノラマガール』論——

第 3 章 女性と〈消費〉——『pink』論——

第 4 章 「少女」の「繭」としての東京——『東京ガールズブラボー』論——

第 5 章 「文学性」の脱構築——『リバーズ・エッジ』論——

第 6 章 〈内面〉と代弁／表象のポリティクス——「チワワちゃん」論——

第 7 章 〈美〉の共同体を越えて——『ヘルタースケルター』論——

結章

序章では、少女向けの娯楽メディアとして〈少女マンガ〉が形成されてきた歴史的経緯と 1970 年代のその開花期とを押さえるとともに、〈少女マンガ〉が、(若年) 女性のために女性が創り出す、女性独特の感性と〈内面〉を描くものであるという固定観念の定着を確認する。そのうえで、本論文がこの固定観念の修正を図ることを一つの大きな目的とし、そのために、これまで研究が少なかった 80 年代以降の〈少女マンガ〉を対象とすること、とりわけ、女性と社会の双方向的な関係を最も自覚的・先鋭的に表現したマンガ作家であるがゆえに岡崎京子を取り上げることが説明する。

第1章では、〈少女マンガ〉をめぐる言説の歴史、言いかえれば現在までの〈少女マンガ〉批評史を概観する。これまで充実した形ではおこなわれたことのないこの作業を通じて、論者たちの性別によってジェンダー的なバイアスを強く帯びた批評言説が交差・対立し、また結局のところ上記の固定観念が強化されてきたことを明らかにする。かくして少女・女性と社会とを二項対立的に対置する姿勢が〈少女マンガ〉言説のなかで確立されてしまったことを指摘し、両者の関わりを注視するという本論文の基本的立場を提示する。

第2章以降は、岡崎の作品を発表年に従いながら一作品ずつ取り上げる作品論のかたちをとる。

第2章では1987年発表の『ジオラマボーイ・パノラマガール』を取り上げる。作者が〈少女マンガ〉だと言明したこの作品が、〈少女マンガ〉の定番である「ボーイ・ミーツ・ガール」の話型を解体しながら利用していることに着目し、この作品が明確に示している〈少女マンガ〉への批判的距離とそれを保ったうえでの帰属の様態について考察する。とりわけこの作品の舞台である団地の林立する「郊外」という空間が、そこに居住する人間を役割演技的なふるまいに導き、記号消費的な存在に還元することを、80年代をめぐる社会学・都市論を通じて明らかにしつつ、この作品が少女の〈夢〉を新たな形で肯定しようとしていることを論証する。

第3章では、都市のなかで〈消費〉に耽溺する女性を主人公に据えた1989年の『pink』を取り上げる。(セゾングループによって再開発された渋谷のように)70年代以降の日本の都市空間が〈消費〉そのもののための場として舞台装置化されてきたことを検証しながら、この作品が主人公を、一方ではこうした都市の論理を内面化した存在として、他方でそれを疑問視し対象化しようとする存在として描いていることを明らかにする。

第4章では、自らの愛するイメージやモノを通して現実を解釈しようとする「少女」的心性を前景化したテキストとして1990年の『東京ガールズブラボー』を取り上げる。この作品の発表時の時代状況として80年代の高度消費ブームへの懐古的批判が高まりつつあったことを押さえながら、岡崎が、浮薄で過剰な〈消費〉への欲望によって東京という都市空間を想像的に再布置化していく少女を誇張的に描きながら、圧倒的な消費社会のなかで生きる現代女性の主体化の可能性を挑戦的に素描しようとしていたことを明らかにする。

第5章は、バブル経済崩壊後の1993～94年に発表された『リバーズ・エッジ』を、岡崎の新たな作風と問題意識を端的に示す作品として取り上げる。「死」や「血」や「暴力」など、もはや記号や幻想によっては覆い隠せない陰惨な現実を前面に出しながら、積極的に人物の〈内面〉を描写する本作品は「文学的」という修辭で高い評価を得たが、この作品の独自性は、言語表現による〈内面〉の直接提示と図像表現における顔の空白化など、相反する手法の駆使によって、むしろ「文学性」を解体更新している点にあると論証する。

第6章では、1994年発表の小品「チワワちゃん」を取り上げる。バラバラ死体となって発見された「少女」の死の報道をきっかけに、生前に親交のあった若者たちが彼女の〈内面〉を復元するべく証言を積み重ねるさまをテキスト化したこの作品が、他者の〈内面〉を代弁／表象することの不可能性と、その行為がはらむ政治性・暴力性およびある種の倫理性とを俎上に載せた作品であることを考察する。またこの作品が(ブルセラ騒動をはじめ)「少女」像が社会問題化される時代背景のなかで創作されたことを重視し、「少女」そのものがメディアの中で流通し、受容・消費されるという新たな事態に対する岡崎の鋭い批判意識を析出する。

第7章では、不慮の事故により未完に終わったものの岡崎の最高傑作とされる『ヘルタースケルター』(1995～96年発表)を取り上げる。全身を徹底的な整形によって改造することで〈美〉の頂点に君臨するトップモデルの栄光と凋落を描くこの作品の社会背景として美容整形ブームとその言説を検証しながら、〈美〉というイデオロギーが女性を拘束し規範化する装置として働くとともに女性の主体化を促す駆動力ともなることを論じる。こうした両義性を体現する主人公は、読者を惹きつけつつ感情移入を許さないという意味でも

両義的な存在であり、このマンガテキストが、どのような技法を駆使してこうした両義性を表出し、その両義性の上で女性の新たな主体化の可能性を提示しようとしていたのかを分析する。

結章では、本論文全体を振り返りながら、マンガという文化的生産物を社会の諸関係の結節点として据え、そこで取り交わされる複雑な応答関係を読み解いていくようなマンガ研究の方向性を切り拓くものとして、本論文の研究作業を位置づけ直す。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、独自の問題意識と精緻な論証作業および斬新なテキスト分析によって〈少女マンガ〉研究をまぎれもない学術活動の一つにまで高めた画期的な研究である。学問的な信頼性を有するとともに独創的な刺激を、文学理論、都市論、メディア論、ジェンダー論、サブカルチャー論など多方面においてもたらすこの研究の価値は数多く指摘できるが、そのなかでも以下の諸点がこの論文の特筆すべき成果として挙げられる。

まず〈少女マンガ〉というジャンルを研究上独立したものとして位置づけることによって可能となった、マンガ研究上の貢献である。その最盛期として多く言及される1970年代ではなく、その後の変容期である1980～90年代に射程を置くことによって、〈少女マンガ〉史を新たに描出し、さらにはマンガそのものの文化的存在意義までも照らし出し直すことに成功した。岡崎京子という傑出したマンガ作家を取り上げ、これまでの〈少女マンガ〉研究ではほとんどなかった作家論というスタイルを完成させた意義も大きい。

マンガ研究上の手法として高く評価できるのは、一つには、学術領域横断的なアプローチをきわめて高度なレベルにおいて遂行したことである。社会学、都市論、メディア論、ジェンダー論、サブカルチャー論あるいは文学理論など、本論文が援用する学問分野は多岐にわたり、しかも的確な論証がそこから組み立てられている。マンガ研究ないしは文化研究をいかにして既存の諸学問分野と接続させ、新たな学術成果にまで結び付けるか、本論文はその一つのモデルを提示し得たと言える。

マンガ研究の手法として高く評価すべきもう一点は、傑出したマンガテキスト分析である。これまでさまざまな論者によって散発的にあるいは技法解説的に提示されてきたマンガ表現技法を確実に押さえた上で、実際のマンガ作品が、それらをどのように生かし、さらにはどのような新たな効果をそこに付与しているのか、またこれまで指摘されたことのないどのような技法が実際のテキストには存在するのか、こうした点を具体的な作品分析のなかで明示したことは、今後のマンガ研究に資する大きな成果である。

本論文はまた、80年代以降の現代社会分析としても優れた価値を有している。社会学やメディア論で指摘されてきた論点を、社会に生きる人間の側から捉え直し、新聞雑誌の記事や広告など独自の素材を利用しながら、現代日本社会とはいかなる特質を持つものであるのかを析出する点で本論文はいくつもの刺激的な貢献をなしている。

対象作品の発表媒体（初出時の掲載雑誌）を視野に入れた受容論的観点など本論文がやや手薄である側面もむろんいくつかは指摘できるが、それらはいささかも本論文の高い学術的成果と優れた完成度を損傷するものではない。本論文は、マンガ専門研究にも文化一般研究にも資する卓越した業績である。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。